

# 大学生の「血液型人間学」に対する態度について ——文教大学越谷キャンパスでの9年間の定点観測結果から——\*

丹治哲雄\*\*・青木忠明\*\*\*

## Attitude toward 'Belief in relationship between ABO blood types and personality traits' of university students: Longitudinal observation at Bunkyo University, Koshigaya Campus for the last nine years

Tetsuo Tajimi and Nariaki Aoki

### I. 緒言

性格や行動特徴とABO式の血液型との間にある種の関連があるとする、いわゆる「血液型人間学」は現在も我が国に広く浸透している。この説は科学的合理的根拠を持たない俗説である。一種のステレオタイプの対人認知を生み、偏見や人権侵害につながる可能性を持つことが指摘されている（例えば、菊地，1999）。現代心理学ではこうした俗説を支持する実証的な研究はほとんど提出されていないし、我が国の多くの心理学研究者がこの説を否定的に考えているのが現状である。このような俗説が、我が国でどのように発生し、どのように広まり、現在どのような使われ方をしているか等については、すでに何人かの研究者によって詳細な実証的研究が行われており、いくつかのすぐれた総説が発表されている（例えば、大村，1990；松田，1991；白佐・井口，1993；松田，1994；詫摩・佐藤，1994；草野，1995；大村，1998など）。また、なぜこうした俗説が広く受け入れられるのかについても心理学的な立場から様々な研究が行われてきた（例えば総説としては、佐藤・渡邊，1992など）。

筆者らも、1991年から文教大学越谷キャンパスで大学生たちの「血液型人間学」に対する態

\* 本稿の要旨は、「非合理現象信奉に関する研究(5)「血液型人間学」・文教大学越谷キャンパスでの9年間の定点観測結果から」と題して、2000年度文教大学生生活科学研究所生活科学研究発表会（2000年12月22日・文教大学）で発表した。また、本報告の結果の一部は、「大学生と『血液型人間学』——文教大学越谷キャンパスでの9年間の定点観測結果から——」と題して、ジョイン第40号（2001年1月1日・文教大学学園広報室）に発表した。

\*\* 文教大学人間科学部人間科学科

\*\*\* 1997年度文教大学人間科学部卒・1998年度文教大学人間科学部研究生・（現）日本大学大学院文学研究科博士前期課程2年

度測定を開始し（丹治・落合・渡辺・秋山，1991）、越谷キャンパスでの浸透の状況や使われ方、また、その対人認知に及ぼす影響などについての報告をおこなってきた（丹治，1992；丹治，1994）。

今回は、1992年から2000年までの9年間にわたる文教大学越谷キャンパス学生たちの「血液型人間学」に対する態度の推移について概観的に報告し、また、「血液型人間学」信奉との関係が予想されるいくつかの要因間の関連について考察してみることにした。

## Ⅱ. 調査方法

### 1. 調査対象者・調査年・調査時期など

各調査年の男子学生・女子学生別の調査対象者数、合計人数を表1に示す。調査対象学生は、そのほとんどが、筆者（丹治）が越谷キャンパスで担当する共通教養科目（旧称一般教育科目）「心理学（対人関係の実験心理学）」の受講生であり、一部に、共通教養科目「総合講座Ⅰ（健康の科学）」の受講生が含まれている。学年は1年生が圧倒的多数を占める。調査は1992年は7月に実施したが、それ以外の年はその年の11月から12月頃実施している。なお、この調査のほとんどが講義の一環として授業中に実施され、その結果は、その後の授業時に受講生たちにフィードバックされ教材の一部として使用されている。

表1. 調査年と男女別対象者数

調査年	男子学生	女子学生	合計人数
1992年	206名	252名	458名
1993	69	179	248
1994	42	111	153
1995	55	157	212
1996	49	150	199
1997	76	172	248
1998	38	82	120
1999	75	162	237
2000	86	196	282
総計	696	1461	2157

### 2. 調査票と分析対象項目

この調査では、「『血液型人間学』に対する態度調査」と題する9ページからなるB5判の調査票を使用している。今回の報告では、この調査票の冒頭部分に掲載されている4問に対する回答を分析の対象とした。この4問は、「血液型人間学」に対する知識の程度、友人たちとの会話へ登場する程度、非科学性の認識状況、信奉状況をチェックするために設けられた質問項目である。以下にその4問と回答方法を示す。

(1)「あなたは、血液型（ABO型）と性格特徴・行動特徴との間に何らかの関係があるとする、いわゆる『血液型人間学』という考え方があるのをご存じですか？」（知識状況チェック・「まったく知らない」から「非常によく知っている」の5肢選択。データ処理にあたっては、「まっ

たく知らない」「あまりよく知らない」を「知らない」として、また、「やや知っている」「よく知っている」「非常に知っている」を「知っている」とまとめて処理した)。

(2)「友人などとの会話の中で、自分や他人の血液型と性格特徴・行動特徴とを関連させた話題が出ることはありますか?」(会話への登場状況チェック・「まったく出ない」から「しょっちゅう出る」の5肢選択。データ処理にあたっては、「まったく出ない」「あまり出ない」を「出ない」として、また、「時々出る」「よく出る」「しょっちゅう出る」を「出る」とまとめて処理した)。

(3)「あなたは、こうした『血液型人間学』が科学的に実証された正しいものとお考えですか?」(非科学性の認識チェック・「はい」「いいえ」の2肢選択)。

(4)「あなたは、こうした『血液型人間学』を信じていますか?」(信奉状況チェック・「はい」「いいえ」の2肢選択)。

調査票の、以降掲載のサーストン法による『血液型人間学』に対する態度測定用の質問39項目(丹治・落合・渡辺・秋山, 1991)、また、血液型ラベルによる対人認知の歪みを確認するための実験部分の結果については、今回の報告では割愛した。

### Ⅲ. 結果及び考察

#### 1. 9年間の「血液型人間学」に対する態度の推移に関する調査結果

表2からに表4に、文教大学越谷キャンパス学生たちの9年間の「血液型人間学」に対する態度の推移に関する調査結果を示す。表2は男女を込みにした全体の結果を、また表3は男子学生、表4は女子学生のデータをそれぞれ表している。

表2. 「血液型人間学」に関する文教大学越谷キャンパスでの過去9年間の定点観測結果(全体)

観測年	測定人数	知識率	会話への登場率	非科学性認識率	信奉率
1992年	458名	76.6%	85.5%	88.4%	31.0%
1993	248	75.8	83.1	77.8	44.9
1994	153	73.2	82.4	71.2	54.9
1995	212	76.4	85.4	88.7	42.9
1996	199	71.4	79.4	85.4	44.7
1997	248	77.8	84.3	85.1	47.2
1998	120	70.8	81.7	83.3	43.3
1999	237	85.2	84.3	90.7	31.6
2000	282	79.1	88.7	90.8	34.8
全体	2157	77.3	84.3	85.6	39.8

表2の全体結果を見ると、「血液型人間学」を知っている比率(知識率)も、また、この話題が友人たちとの会話に登場する率(会話への登場率)もともに高く、この説が広く根深く学生たちの間に浸透していることが伺える。過去9年間、数値に若干の増減はあるが、それが減衰していく傾向は認められず、この俗説はキャンパス内に強固に存在し続けていることがわかる。また、

表3と表4の男子学生と女子学生の知識率、会話への登場率を比較してみると、どちらの場合も女子学生の方が高い率を示しており、これは調査年を越えた一貫した傾向であるといえる。特に、女子学生の会話への登場率を見ると、どの年も80%を下回ることはなく、全体的に見ても90%に近い率を示しており、こうした話題を友人との会話の中に登場させる女子学生がかなり高い率で存在していることが伺えた。「血液型人間学」に関する知識やそれを信奉する割合は、男性よりも女性のほうが高いことは幾つかの先行研究でも指摘されており（白佐・井口, 1993）、9年間にわたる大学生を対象とした本調査結果からもこうした傾向は確認できた。

表3. 「血液型人間学」に関する文教大学越谷キャンパスでの  
過去9年間の定点観測結果（男子学生）

観測年	測定 人数	知識率	会話への 登場率	非科学性 認識率	信奉率
1992年	206名	72.8%	81.1%	89.8%	20.9%
1993	69	68.1	62.3	79.7	24.6
1994	42	66.7	66.7	81.0	28.6
1995	55	60.0	76.4	89.1	20.0
1996	49	69.4	63.3	91.8	26.5
1997	76	63.2	59.2	90.8	26.3
1998	38	60.5	65.8	94.7	31.6
1999	75	85.3	72.0	93.3	22.7
2000	86	73.3	82.6	94.2	18.6
全体	696	71.1	72.7	89.7	23.1

表4. 「血液型人間学」に関する文教大学越谷キャンパスでの  
過去9年間の定点観測結果（女子学生）

観測年	測定 人数	知識率	会話への 登場率	非科学性 認識率	信奉率
1992年	252名	79.8%	89.7%	87.3%	39.3%
1993	179	79.8	91.1	77.1	52.5
1994	111	75.7	88.3	65.8	64.9
1995	157	82.2	88.5	88.5	51.0
1996	150	72.0	84.7	83.3	50.7
1997	172	84.3	89.0	82.6	56.4
1998	82	75.6	89.0	78.0	48.8
1999	162	85.2	88.9	89.5	35.8
2000	196	81.6	91.3	81.4	41.8
全体	1461	79.9	88.7	83.6	47.8

それでも、この俗説が非科学的なものであることへの認識率（非科学性認識率）も高く、全体的に見ると、1999年、2000年では90%強の学生がこうした説が科学的に実証されたものではないと認識していた。また、この場合も女子学生が男子学生にくらべて全般に非科学性認識率が低いという結果も示された。ただ、この説を信じているかどうか（信奉率）をみると、非科学性認

識率の高さにもかかわらず、30%から40数%の学生たちが「信じている」と回答していた。この場合も、女子学生が男子学生にくらべて全般に高い信奉率を示していた。

## 2. 相関分析結果

次に、9年間の全体データを用いて、「血液型人間学」に対する「知識率」「会話への登場率」「非科学性認識率」「信奉率」間の関連度を Spearman の順位相関係数 ( $r_s$ ) を用いて検討してみた。図1に、4つの変数間の相関係数を示す。±0.7以上の相関（「相関がかなりある」）が示された組み合わせが6組中4組認められた。いずれも無相関検定で有意な相関であることが確認された（いずれも  $p < 0.05$ ）。

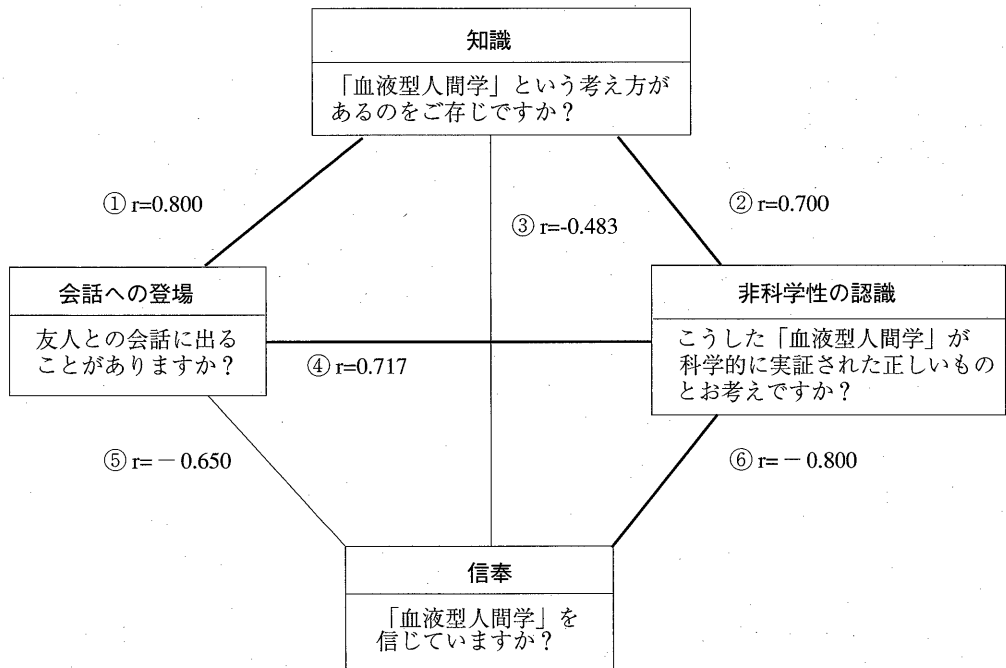


図1. 「知識率」「会話への登場率」「非科学性認識率」「信奉率」間の相関図

相関分析の結果を見ると、「血液型人間学」に関する知識を持つ学生の比率と「血液型人間学」の話題を友人たちとの会話に登場させる学生の比率、及びそれが科学的に実証された説ではないと考える学生の比率にはそれぞれ正の関連が認められた。また、「血液型人間学」を友人たちとの会話に登場させる学生の比率とそれが科学的に実証された正しい説ではないと考える学生の比率にも正の関連が認められた。さらに「血液型人間学」が科学的に実証された正しい説ではないと考える学生の比率と、「血液型人間学」信奉率とは負の関連があることが示された。

「血液型人間学」が友人たちとの会話の潤滑油的機能や娯楽性機能を持つことは既に指摘されており（例えば、上野・松井，1991など）、特に女子学生を中心に友人たちとの会話に登場する率の高さは今後もあまり変化しないのかもしれない。ただ、そうした友人たちとの会話の中で、「血液型人間学」と適合しないケースに出会ったり、また、「血液型人間学」が科学的に実証され

たものではないことが話題になれば、それが「血液型人間学」の信奉率の低下へとつながっていく可能性もあるのかもしれない。

#### IV. 論 議

佐藤は、「血液型人間学」的な対人判断が、我が国の血液型分布では少数派であるAB型に対する否定的態度を生み、こうしたことがある一部の人たちに心理的被害や苦痛を与えていることを指摘し、「ブラッドタイプ・ハラスメント」といった造語を発表しこの俗説の蔓延に警鐘を鳴らしている（詫摩・佐藤，1994）。

全体的な非科学性認識率と信奉率を見ると、文教大学越谷キャンパスでは「血液型人間学」を科学的に実証された正しいものとは考えておらず、また、それを信じていない「血液型人間学」否定派の学生が多いことが伺えた。ちなみに2000年の調査によると、そうした学生は全体の64.2%（181名/282名）に及んでいた。ただ、そうした否定派学生を対象に、1992年に丹治が行った対人認知に関する実験によると、こうした否定派学生たちですら、判断を求められた人物の対人認知が、血液型ラベルが異なるだけで仮説確証バイアスの「血液型人間学」に沿った形でなされてしまう傾向（例えばA型ラベル人物は真面目な印象など）があることが指摘されており（丹治，1994）、この「血液型人間学」が影響力の強い俗説であることは認識すべきであろう。

今後も大学生たちに対して「血液型人間学」が科学的に実証されたものではない単なる俗説であり、偏見差別的な対人認知や人権侵害を生む可能性のある説であることは指摘し続ける必要があると思われる。

#### 参考文献

- 1) 上瀬由美子・松井豊 1991 血液型ステレオタイプの機能と感情的側面 日本社会心理学会 第32回大会発表論文集, 296-299.
- 2) 菊地聡 1999 超常現象の心理学：人はなぜオカルトにひかれるのか 平凡社
- 3) 草野直樹 1995 「血液型性格判断」の虚実 講座・超常現象を科学する② かもがわ出版
- 4) 松田薫 1991 「血液型と性格」の社会史 河出書房新社
- 5) 松田薫 1994 改定第二版「血液型と性格」の社会史：血液型人類学の起源と展開 河出書房新社
- 6) 大村政男 1990 血液型と性格 福村出版
- 7) 大村政男 1998 新訂血液型と性格 福村出版
- 8) 佐藤達哉・渡邊芳之 1992 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究 心理学評論, 35, 234-268.
- 9) 白佐俊憲・井口拓自 1993 血液型性格研究入門 川島書店
- 10) 丹治哲雄・落合信仁・渡辺千歳・秋山胖 1991 『血液型人間学』に関する社会心理学的研究：(1) 文教大学越谷キャンパス1年生の態度測定を中心に 1991年度文教大学生生活科学研究発表会発表用資料
- 11) 丹治哲雄 1992 『血液型人間学』に関する社会心理学的研究：(2) 文教大学越谷キャンパスでの浸透の現状と使用のされ方について 1992年度文教大学生生活科学研究発表会発表用資料
- 12) 丹治哲雄 1994 血液型ステレオタイプと対人認知 生活科学研究 (文教大学生生活科学研究所), 16, 16-20.
- 13) 詫摩武俊・佐藤達哉 (編) 1994 血液型と性格：その史的展開と現在の問題点 現代のエスプリ, No.324 至文堂